智恵子抄　高村光太郎と智恵子　その愛

高村光太郎「手」　大正 7 年

―美に関する製作は公式の理念や、壮大な民族意識というようなものだけでは決して生れない。そういうものは或は製作の主題となり、或はその動機となる事はあっても、その製作が心の底から生れ出て、生きた血を持つに至るには、必ずそこに大きな愛のやりとりがいる。それは神の愛である事もあろう。大君の愛である事もあろう。又実に一人の女性の底ぬけの純愛である事があるのである。自分の作ったものを熱愛の眼を以て見てくれる一人の人があるという意識ほど、美術家にとって力となるものはない。作りたいものを必ず作り上げる潜力となるものはない。製作の結果は或は万人の為のものともなることがあろう。けれども製作するものの心はその一人の人に見てもらいたいだけで既に一ぱいなのが常である。私はそういう人を妻の智恵子に持っていた。　（高村光太郎『智恵子の半生』より）

拝啓　時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、私ども菊池寛実記念 智美術館の活動に多大なるご理解とご協力を賜り、誠に有難うございます。

当館では次回、4 月 29 日（木・祝）より「智恵子抄　高村光太郎と智恵子　その愛」を開催いたします。本展は、明治から昭和にかけ彫刻や絵画、詩作、文筆活動と幅広く活躍し、日本の美術史に大きな足跡を残した高村光太郎と、光太郎への愛に生き、自らの芸術の大成を望みながらも、精神を病み、道半ばで没したその妻・智恵子、この二人の純度の高い芸術を回顧するものです。

智恵子の死後発表された、光太郎による詩集『智恵子抄』（昭和 16 年刊）と、病床の智恵子が残した 1000 点余に及ぶ紙絵は、愛と芸術を貫いた二人の記録として、世間に大きな衝撃を与え、今なお鮮烈な印象を残しています。

展覧会では、光太郎の彫刻作品や詩稿、光太郎の甥である写真家の高村規（ただし）氏の工房で精巧に再現された智恵子の紙絵 100 点などにより、二人の愛と創造の軌跡を辿るものです。

つきましては展覧会の概略をご案内申し上げますので、本展を多くの皆様にお知らせいただき、周知にご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

敬具

展 覧 会 概 要

■展覧会名　「智恵子抄　高村光太郎と智恵子　その愛」
■会　　場　菊池寛実記念 智美術館　東京都港区虎ノ門 4-1-35　☎03-5733-5131
■会　　期　2010 年 4 月 29 日[木・祝] ～ 7 月 11 日[日]
■休 館 日　毎週月曜日(但し 5 月 3 日は開館)、5 月 6 日(木)
■開館時間　午前 11 時～午後 6 時（最終入館は午後 5 時 30 分まで）
■主　　催　財団法人菊池美術財団、高村光太郎記念会、日本経済新聞社(予定)
■後　　援　文化庁
■協　　賛　財団法人東日本鉄道文化財団、京葉ガス株式会社
■協　　力　東日本旅客鉄道株式会社(予定)
■観 覧 料　一般 1,000 円　大学生 800 円　小中高生 500 円
（障害者手帳をご提示の方、およびその介護者 1 名は無料となります。）
■展示作品　高村光太郎　彫刻 13 点、詩稿・他
高村智恵子　紙絵 100 点
※紙絵は作品保存のため、高村規氏による複製の展示となります。また、会期中展示替えを予定しております。
■関連行事　会期中、高村規氏等関係者、研究者による対談、学芸員によるギャラリートーク、西洋館見学会などを予定。（日時が決まりましたら HP にて公開します。）

光太郎・智恵子　年譜

高村光太郎(1883[明 16]～1956[昭 31])／高村智恵子(1886[明 19]～1938[昭 13])

光太郎と智恵子
箱根・大涌谷にて
昭和 2 (1927)年

1883 光太郎、東京市下谷区に木彫家・高村光雲の長男として生まれる。
1886 智恵子、福島県安達郡油井村に酒造業・斎藤今朝吉(後、長沼家に養子縁組)の長女として生まれる。
1898 光太郎、東京美術学校予科に入学。翌年、本科一年彫刻科に進学。
1900 光太郎、『ホトトギス』等に投稿、のち与謝野鉄幹に惹かれ、新詩社に入る。
1903 智恵子、日本女子大学校に入学、家政科に進む。
1906 光太郎、アメリカ、イギリス、フランスに留学（1909 年帰国）
1910 光太郎、雑誌『スバル』に評論「緑色の太陽」を掲載、神田に日本初の画廊「琅玕洞」を開く。
1911 柳八重の紹介で光太郎と智恵子、出会う。智恵子、『青鞜』創刊号の表紙絵を描く。
1912 光太郎、岸田劉生、木村荘八、萬鉄五郎らとフュウザン（のちヒュウザン）会結成。
1914 光太郎と智恵子結婚。駒込林町 25 番地のアトリエで生活をはじめる。
1917 光太郎、米国個展を目論み資金調達に頒布会を試みるも失敗。《手》、《裸婦》等初期代表作が生まれる。
1924 光太郎、木彫小品の頒布をはじめる。こうした作品は貴重な生計の足しとなる。
1929 智恵子、健康状態悪化。父の死後、経済的困窮にあった長沼家が破産、一家離散となる。
1931 光太郎の旅行中、智恵子に精神分裂の兆候があらわれる。
1934 智恵子は実母が同居する妹・節子の婚家（千葉県九十九里浜）に転地するもさらに病状が悪化し、12 月アトリエに戻る。光太郎の自宅看病も限界となり、翌年南品川のゼームス坂病院に入院。
1938 10 月 5 日、智恵子、ゼームス坂病院で没す。療養中に制作された紙絵千数百点が残る。
1941 8 月、『智恵子抄』（竜星閣）刊行。戦中は評論、詩作などを行う。
1945 4 月、空襲により駒込林町のアトリエ焼失。岩手県花巻町の宮澤清六（宮澤賢治の実弟）の招きにより同地に疎開。宮澤家が戦災で焼失後は岩手県稗貫郡大田村山口の山小屋で自炊生活を送る。終戦後も 7 年間この地で隠棲する。
1947 医師より結核と診断を受ける。連詩『暗愚小伝』発表。
1950 詩集『典型』、詩文集『智恵子抄その後』刊行。
1952 10 月、十和田湖河畔に設置する彫像制作の依頼を受け裸婦像を作ることを決意、帰京。
1953 10 月、十和田国立公園功労者顕彰記念碑の裸婦像が現地で除幕。式典に参列。
1955 1 月 1 日の読売新聞に詩「生命の大河」発表。4 月 2 日逝去。

展 示 内 容 の ご 紹 介

本展は、光太郎の彫刻、詩稿などの作品と、智恵子が残した中から選ばれ、再現された 100 点の紙絵により構成されます。これらを巡ることにより、詩集「智恵子抄」に描かれた世界を中心に、二人の歩みとそれぞれが残した芸術、お互いを求め続けた想いの深さを感じていただくことが出来るでしょう。

高村光太郎の詩集『智恵子抄』

『智恵子抄』は、光太郎によって明治 45(1912)年より約 30 年間に渡って書かれた、妻・智恵子に関わる詩 29 篇、短歌 6 首、随筆 3 編を収録した詩集です。智恵子の没後 3 年を経た、太平洋戦争直前の昭和 16(1941)年 8 月に刊行された本書は、光太郎が紡いだ率直でひたむきな愛の言葉の集成であり、発表されると、戦時下の厳しい状況にも関わらず昭和 19 年 5 月までに 13 刷を重ねました。詩集には、「いやなんです　あなたのいつてしまふのが―」と、当時許婚のあった智恵子に向けた求愛の詩、「人に」(明治 45 年)に始まり、光太郎の代表詩が数多く含まれています。智恵子抄に結晶した二人の純粋な愛のかたちは、年月に色あせない強い光を今なお保ち続けています。本展では中でも有名な「レモン哀歌」など、代表作の詩稿を展示します。

光太郎の彫刻と詩作について

光太郎を詩人として記憶する人も多いと思いますが、光太郎自身は、自分は何をおいても彫刻家であり、彫刻は自分の血の中にある、と書いています。その言葉通り、父・光雲は江戸仏師の流れを汲む明治を代表する木彫家であり、長男として生まれた光太郎がその後を継ぐことは、幼い頃より期待され、自身が受け入れてきた宿命でした。そのため、若き光太郎が詩や短歌に傾倒することを、余技に熱中していると揶揄する声もあったといいます。しかし、青年時代より内部から湧き続けた、言葉や詩への欲求は、光太郎にとって断ち難いものでありました。言葉を巡る創作は、彫刻に文学的抒情性など、他の要素が夾雑(きょうざつ)して来るのを防ぐため、内部の衝動を別な形として世に生み出すための、不可欠な営みだったといいます。彫刻と詩の世界は、どちらも光太郎の根幹を成すものでした。

「詩を書かないでゐると死にたくなる人だけ詩を書くといいと思ひます。」(「詩界に就いて」昭和２年)

「私は自分の彫刻を護るために詩を書いてゐる」(「自分と詩との関係」昭和 15 年)

光太郎の彫刻作品は、原型が戦災で焼失するなど、現存数が決して多くはありません。出品される《手》や、晩年の《十和田裸婦像中型制作》等の代表作と、光太郎の言葉の世界を同時に体感することによって、その豊かな人間性と深い芸術の射程を、改めて実感していただけることと思います。

智恵子の紙絵

光太郎と出会ったころの智恵子は、大学を卒業後、郷里に帰省することなく太平洋画会研究所に通い、自らの制作に没頭する、新しい女性の一人でありました。結婚後も、互いの活動を尊重し、生活と芸術との両立を目指します。結婚後より昭和初頭までの二人の生活は、光太郎の創作とともに、最も充実した時代であったといえます。

けれども、昭和 4 (1929) 年に実家の長沼家が破産し、その頃より心身に疲労を重ねていた智恵子は、同 6 年頃より精神に変調をきたし、やがて療養生活を余儀なくされます。最後の入院先となった南品川の病室で、治療のためにと光太郎が持参した千代紙から始められたのが、智恵子の紙絵でした。折紙から始まった制作は、次第に技巧を凝らした貼り絵となり、繊細な形と独自の色彩感覚を持った、美しい「紙絵」へと発展します。

智恵子の最晩年、51 歳の頃より作られた紙絵の数は千数百枚に及びます。これらは一人の女性が療養生活から生み出した私的小品群にも関わらず、没後公開されると、至純な情感を湛える作品として、多くの人に共感と感動を呼び、彼女自身の評価を高めることとなりました。

紙絵のオリジナルは、材質の脆弱さのため、現在はまとまって展示公開することが困難となっていますが、光太郎の甥で写真家の高村規氏により複製再現され、鮮やかな色彩のまま、細部まで鑑賞することが出来るようになりました。本展では、その中から 100 点を展観します。(会期中、展示替えの予定)

貸 出 画 像

1. 高村光太郎「手」大正7（1918）頃
高39.0×28.7×15.2cm

2. 高村光太郎「薄命児頭部」
明治38（1905）
高21.0×15.4×18.0cm

3. 高村光太郎
「十和田裸婦像中型試作」
昭和28（1953）
高109.0×62.5×36.5 cm

4. 高村智恵子「赤のパターン」
昭和12（1937）頃　24.6×25.0cm

5. 高村智恵子「花のかたち」
昭和12（1937）頃　26.1×35.6cm

6. 高村智恵子「ざくろ」
昭和12（1937）頃　17.5×17.7cm

（撮影者は全て高村規（ただし））

※作品は全図で使用してください。部分使用や作品に文字や他のイメージを重ねることはできません。
※彫刻作品に関しては、提供画像の作品が写らない余白部分のみトリミング可能です。
※使用する作品それぞれに、キャプションの明記をお願いします。

本展覧会の内容に関するお問い合わせ先

菊池寛実記念 智美術館（学芸員：高田、花里）

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を１点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先　菊池寛実記念 智美術館（担当：島崎、高田）
住所：〒105-0001　東京都港区虎ノ門 4－1－35　財団法人 菊池美術財団
TEL.03（5733）5131　　FAX.03（5733）5132　　http://www.musee-tomo.or.jp/

掲載・画像貸出申込書
返信先 FAX:０３－５７３３－５１３２

●貴社基本情報

会社名:	
担当部署:	担当者名:
住所:	
電話	ファックス:
E-MAIL:	

●媒体情報

新聞 雑誌	媒体名:	
	発行日:	発売日:
TV ラジオ	媒体名:	
	放送日:	放送時間:
ネット	URL:	

●画像貸出リスト　※キャプションに作者、タイトルと制作年は必ず入れてください（サイズの単位は㎝）。

希望作品に☑	作品キャプション
□	① 高村光太郎「手」　大正7(1918)頃　高39.0×28.7×15.2（撮影:高村規）
□	② 高村光太郎「薄命児頭部」　明治38(1905)　高21.0×15.4×18.0（撮影:高村規）
□	③ 高村光太郎「十和田裸婦像中型試作」　昭和28(1953)　高109.0×62.5×36.5（撮影:高村規）
□	④ 高村智恵子「赤のパターン」　昭和12(1937)頃　24.6×25.0（撮影:高村規）
□	⑤ 高村智恵子「花のかたち」　昭和 12(1937)頃　26.1×35.6（撮影:高村規）
□	⑥ 高村智恵子「ざくろ」昭和 12(1937)頃　17.5×17.7（撮影:高村規）

●読者プレゼント用チケット希望：　□5 組 10 名様　　□10 組 20 名様

（別紙資料）

智恵子の切抜絵

高村光太郎

精神病者に簡単な手工をすすめるのはいいときいてゐたので、智恵子が病院に入院して、半年もたち、昂奮がやや鎮静した頃、私は智恵子の平常好きだつた千代紙を持つていつた。智恵子は大へんよろこんで其で千羽鶴を折つた。訪問するたびに部屋の天井から下つてゐる鶴の折紙がふえて美しかつた。そのうち、鶴の外にも紙灯籠だとか其他の形のものが作られるやうになり、中々意匠をこらしたものがぶら下つてゐた。すると或時、智恵子は訪問の私に一つの紙づつみを渡して見ろといふ風情であつた。紙包をあけると中に色がみを鋏で切つた模様風の美しい紙細工が大切さうに仕舞つてあつた。其を見て私は驚いた。其がまつたく折鶴から飛躍的に進んだ立派な芸術品であつたからである。私の感嘆を見て智恵子は恥かしさうに笑つたり、お辞儀をしたりしてゐた。

その頃は、何でもそこらにある紙きれを手あたり次第に用ゐてゐたのであるが、やがて色彩に対する要求が強くなつたと見えて、いろ紙を持つて来てくれといふやうになつた。私は早速丸の内のはい原へ行つて子供が折紙につかふいろ紙を幾種か買つて送つた。智恵子の「仕事」がそれから始まつた。看護婦さんのいふところによると、風邪をひいたり、熱を出したりした時以外は、毎日「仕事」をするのだといつて、朝からしきりと切紙細工をやつてゐたらしい。鋏はマニキュアに使ふ小さな、尖端の曲つた鋏である。その鋏一挺を手にして、暫く紙を見つめてゐてから、あとはすらすらと切りぬいてゆくのだといふ事である。模様の類は紙を四つ折又は八つ折にして置いて切りぬいてから紙をひらくと其処にシムメトリイが出来るわけである。さういふ模様に中々おもしろいのがある。はじめは一枚の紙で一枚を作る単色のものであつたが、後にはだんだん色調の配合、色量の均衡、布置の比例等に微妙な神経がはたらいて来て紙は一個のカムバスとなつた。十二単衣に於ける色襲ねの美を見るやうに、一枚の切抜きを又一枚の別のいろ紙の上に貼りつけ、その色の調和や対照に妙味尽きないものが出来るやうになつた。或は同色を襲ねたり、或は近似の色で構成したり、或は鋏で線だけ切つて切りぬかずに置いたり、いろいろの技巧をこらした。此の切りぬかずに置いて、其を別の紙の上に貼つたのは、下の紙の色がちらちらと上の紙の線の間に見えて不可言の美を作る。智恵子は触目のものを手あたり次第に題材にした。食膳が出ると其の皿の上のものを紙でつくらないうちは箸をとらず、そのため食事が遅れて看護婦さんを困らした事も多かつたらしい。千数百枚に及ぶ此等の切抜絵はすべて智恵子の詩であり、抒情であり、機智であり、生活記録であり、此世への愛の表明である。此を私に見せる時の智恵子の恥かしさうなうれしさうな顔が忘れられない。

（昭和 14 年 2 月『新風土』に発表。昭和 26 年『高村智恵子紙絵展覧会カタログ』には「智恵子の紙絵」として収録された。）

「片口のなかのリンゴ」

「白い小花」

「くだもの籠」